

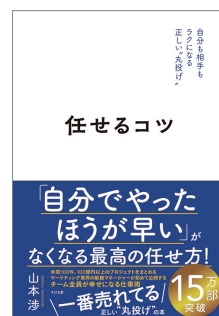
ひろがる本棚

今回の記事を読んで「もっと深く知りたい」「違う角度から考えてみたい」と
思われた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。
記事のテーマにつながる一冊を、三省堂書店がご紹介します。

『任せるコツ』

山本渉

(すばる舎)



「人に任せる」を実際どうやって任せればいいのか、という部分をやさしく教えてくれるのが、山本渉さんの『任せるコツ』です。

副題は「自分も相手もラクになる正しい丸投げ」。丸投げと聞くと、なんだか無責任な感じがして眉をひそめる方もいるかもしれません。本書という丸投げは「相手のことをちゃんと理解した上で信じて任せる」ことを指します。著者の山本さんは若くしてマネージャーになり、たくさんさんの失敗を重ねながら「メンバーの話をよく聞いて理解

し、最後は信じて任せることで、メンバーも組織も伸びていく」ということに気づいたそうです。今では年間100近いプロジェクトをメンバーに「丸投げ」して、しっかり成果を出しているとのこと。

本書では、「どう頼むか」「誰に頼むか」から、丸投げの前後にやっておきたいこと、褒め方まで、任せるためのちょっとしたコツがたくさん紹介されています。記事にあった「聞く耳」や「オープン」としての社長のあり方を、日々の場面でどう活かせばいいか、そのヒントがぎゅっと詰まった一冊です。「任せられない」という心のモヤモヤに向き合ったあとに、この本で「では、どう任せるか」を学んでみると、気持ちも少し軽くなるかもしれません。

『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』

山口周

(光文社新書)



記事の中に「自尊心の高い人は、仕事とは別に打ち込める趣味や、他者と比べない自分だけの評価軸を持っている」というお話がありましたが、この課題感をお持ちの方にお勧めしたいのが、山口周さん『世界のエリートはなぜ「美意識」を鍛えるのか?』です。

電通やボストン・コンサルティング・グループなどで戦略策定や組織開発に従事した山口さんが、現代のビジネスにおいては直感や倫理観である「美意識（アート）」が不可欠である理由を全7章にわたってまとめた一冊。経営者は日々業績という数字で評価されがちですが、だからこそ数字の外側に自分なりの判断基準を持つておくことが、心の安定にもつながるように思います。自分自身と静かに向き合うための思考の書としてお勧めの一冊です。

